

診療ガイド

診療の ^{ハテナ} ? 解決BOOK

～副腎に腫瘍がある

といわれたら～



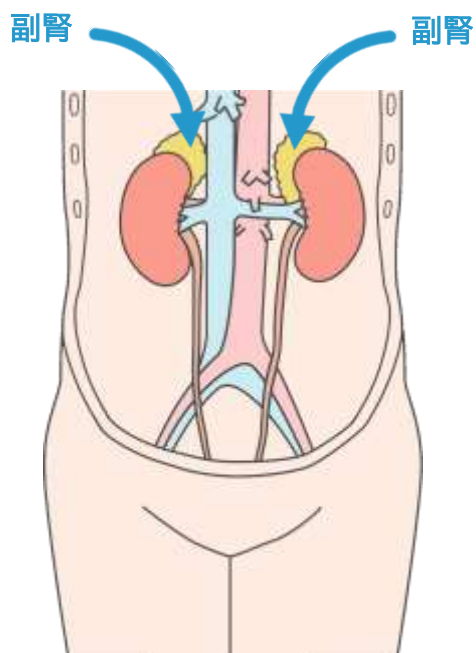
● ● ● Adrenal Tumor

副腎腫瘍？…そもそも、副腎って何？



小さいけれど働き者の「副腎」

副腎は、左右の腎臓の上にある臓器です。副腎皮質ホルモンやカテコラミンと呼ばれる、生命や血圧を維持するために欠かせない、重要なホルモンを分泌している大切な臓器です。

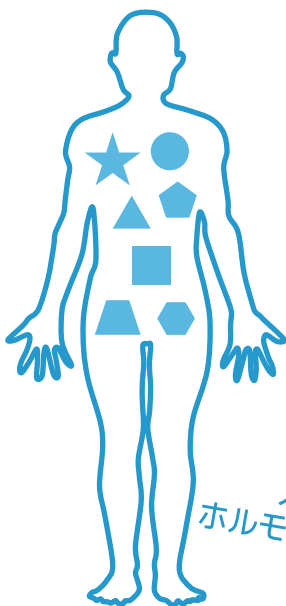


…ホルモンって、何？



全身を調整する大切な「ホルモン」

特定の臓器（内分泌臓器）から血液の中に出てくる物質をホルモンと呼びます。ホルモンが血液の中に出てくることを「分泌」と言います。ホルモンが血液を介して全身に届けられ、作用を発揮することで、いろいろな臓器の働きが調整され、我々は周囲からの変化に対応して生きていくことができます。ホルモンと言えば、男性ホルモン、女性ホルモンといった性ホルモン、成長ホルモンなどが有名ですが、それ以外にも甲状腺ホルモンやインスリンなど、人体には沢山



のホルモンが存在し、私たちの体や臓器を調整しているのです。

ホルモンには厳密な調整機構があるため、過剰になったり、不足したりすることはありません。

人体には
ホルモンがいっぱい

…じゃあ、副腎腫瘍って？



副腎のできもの「副腎腫瘍」

副腎に「できもの」ができた場合、副腎腫瘍と呼ばれます。この腫瘍がホルモンバランスを乱している場合には、症状が見られることもありますが、通常は腫瘍があっても症状のない方がほとんどです。最近では他の目的で実施した CT 検査で偶然発見される場合が多くなっており、「副腎偶発腫」と呼ばれています。



…これからどうしたらいいの？



調べておくべきことは2つ

副腎腫瘍が見つかった場合に、調べておかなければならないことが2つあります。1つ目は「腫瘍が良性か？悪性か？」ということ、2つ目は「腫瘍がホルモンバランスを乱していないか？」という2点です。その理由は、腫瘍が悪性もしくは悪性が否定できない場合、また腫瘍がホルモンバランスを乱している場合には、手術による切除や内服など、何らかの治療を考える必要があるからです。



「腫瘍が良性か悪性か…って、まさか、がん!？」



少ないけれど調べておこう「副腎がん」

腫瘍というのがんを連想する方も多いと思います。副腎に限らず、腫瘍は良性と悪性（がん）に分類できますので、副腎でもその区別をする必要があります。

副腎のがん（副腎がん）はそれ程多く見られる病気ではありません。しかし、副腎がんの予後は不良（長生きできない）と言われており、がんかどうかを判断することはとても重要なことです。

一般的にがんの診断は、腫瘍の一部を採取してその中にがん細胞を確認する「生検」と呼ばれる検査で確定します。しかし副腎では、①臓器が体の奥に存在するため細胞の採取に危険を伴うこと、②がん細胞が腫瘍の一部にしか存在しないこともあり、生検で診断がつかない場合もあることから、通常生検を行うことはしません。そこで、CT や MRI といった画像の検査を用いて、腫瘍の形や大きさ、写り方を参考に判断しています。また、副腎がんでは特殊なホルモンを

分泌していることもあり、血液検査でホルモンバランスを評価することも参考になります。



腫瘍が良性だったら、どうなるの？
悪性だったら、どうなるの？



良性なら経過観察、悪性なら治療を

CT や MRI、血液検査などの結果を総合的に判断して、次のように対応します。

- 副腎がんもしくはその可能性が高い場合
→ 手術治療、抗がん剤治療、緩和治療など
- 副腎がんの可能性が否定できない場合
→ 状況に応じて手術を検討
- 副腎がんの可能性が低い場合
→ 定期的な画像による経過観察

ただし、経過観察を行っていくうちに、腫瘍が大きくなっていく場合には副腎がんの可能性があります。現時点で副腎がんが考えにくくても、定期的に画像検査（通常はCT）を行って、経過観察することが必要となります。



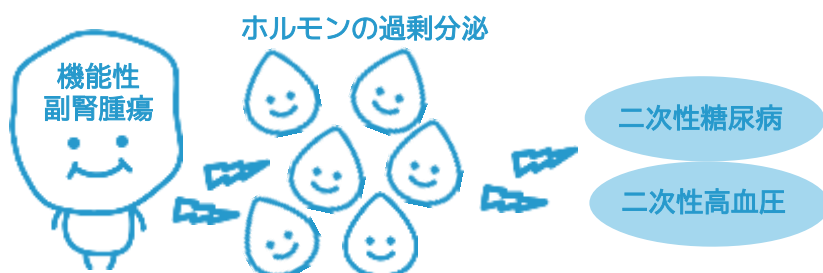
どうしてホルモンバランスを乱していないか
を調べる必要があるの？



他の病気を引き起こす、ホルモンバランスの乱れ

ホルモンという側面を見た場合、副腎腫瘍には2つの種類があります。一つは、腫瘍がある特定のホルモンを過剰に作ることでホルモンバランスを乱している場合です。そのような腫瘍は「機能性副腎腫瘍」と呼ばれています。もう一つは、腫瘍がホルモンバランスを乱していない場合で、こちらは「非機能性副腎腫瘍」と呼ばれています。

機能性副腎腫瘍は、過剰になっているホルモンの種類によってさらに細かく分類されますが、いずれもホルモンバランスの乱れによって、糖尿病や高血圧といった病気が引き起こされることがあります。一般的に糖尿病や高血圧は体質と生活習慣が合わさって生じるため、「生活習慣病」と呼ばれていますが、ホルモンバランスの乱れによって生ずる糖尿病や高血圧は、二次性糖尿病や二次性高血圧と呼ばれ、区別されています。この二次性糖尿病や二次性高血圧は、副腎腫瘍を切除することで、改善もしくは治癒できる場合があります。そのため、既に糖尿病（予備群も含む）や高血圧で治療中の方、もしくは検診などで指摘されたことのある方は、機能性副腎腫瘍であるかどうか特に重要となります。



自覚症状がなくても、ホルモンバランスの
検査を受けなきゃいけないの？



症状が出ると、「時すでに遅し」！？

ホルモンバランスの乱れ、つまり過剰なホルモンによる影響は、自覚症状としては表れにくいものです。しかし症状がなくても、確実に臓器は変化を起こしています。そして症状が出るのは進行してしまってからなので、その時には取り返しのつかないことになっているかもしれません。

ホルモンバランスを乱している副腎腫瘍を治療しなければならない理由の一つは、糖尿病や高血圧を引き起こすからです。副腎腫瘍による糖尿病や高血圧は手術（副腎腫瘍の摘出）によって治ってしまう可能性がありますが、手術の効果は、早期に行った方が大きいとされます。進行してからでは、手術をしても糖尿病や高血圧が治りきらないことがあるため、副腎腫瘍が発見された時点での検査をお勧めしています。

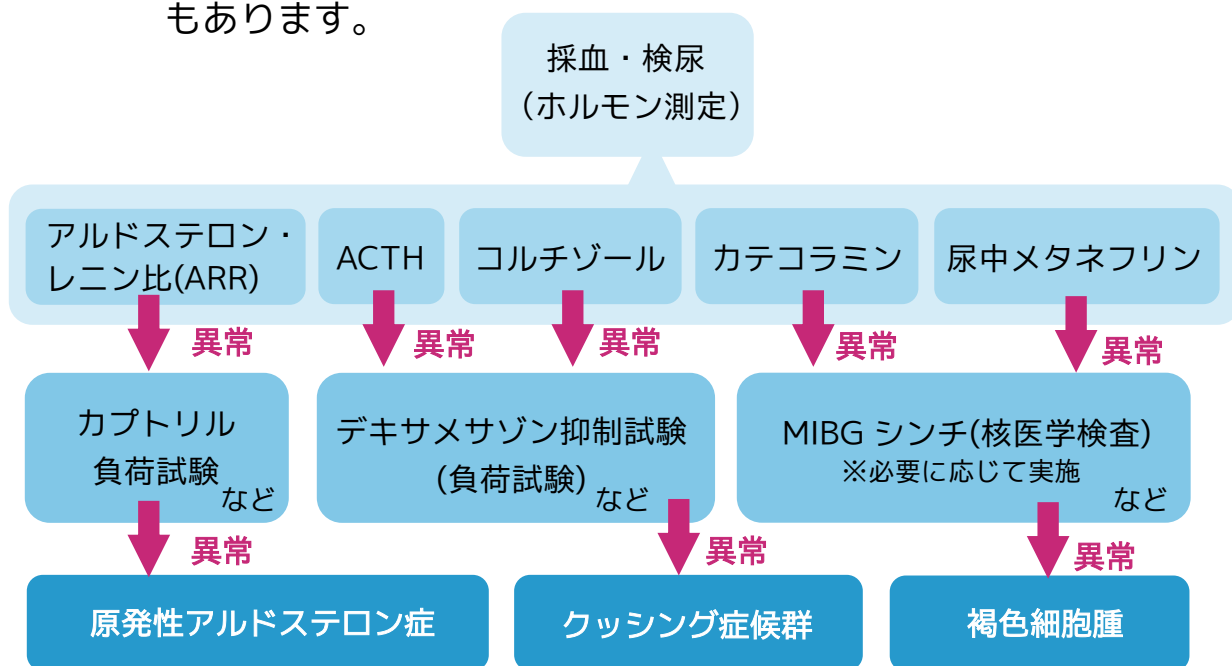


どうやってホルモンバランスの検査をするの？



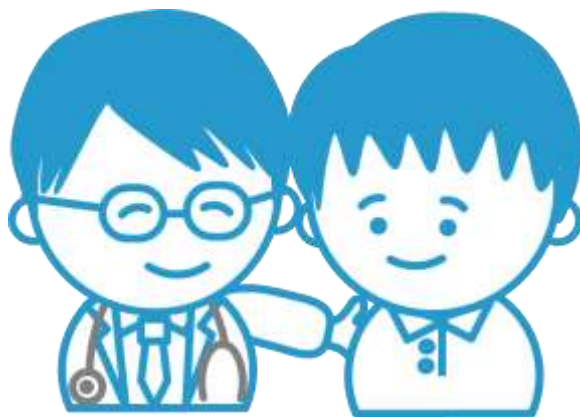
まずはスクリーニング検査から

まずは血液検査などで、大雑把にホルモンバランスの乱れがないかを調べます（スクリーニング検査）。その上で、異常が見られたホルモンがあれば、病気の診断のために、より詳しい検査を実施していくことになります。場合によっては検査入院をお勧めすることもあります。

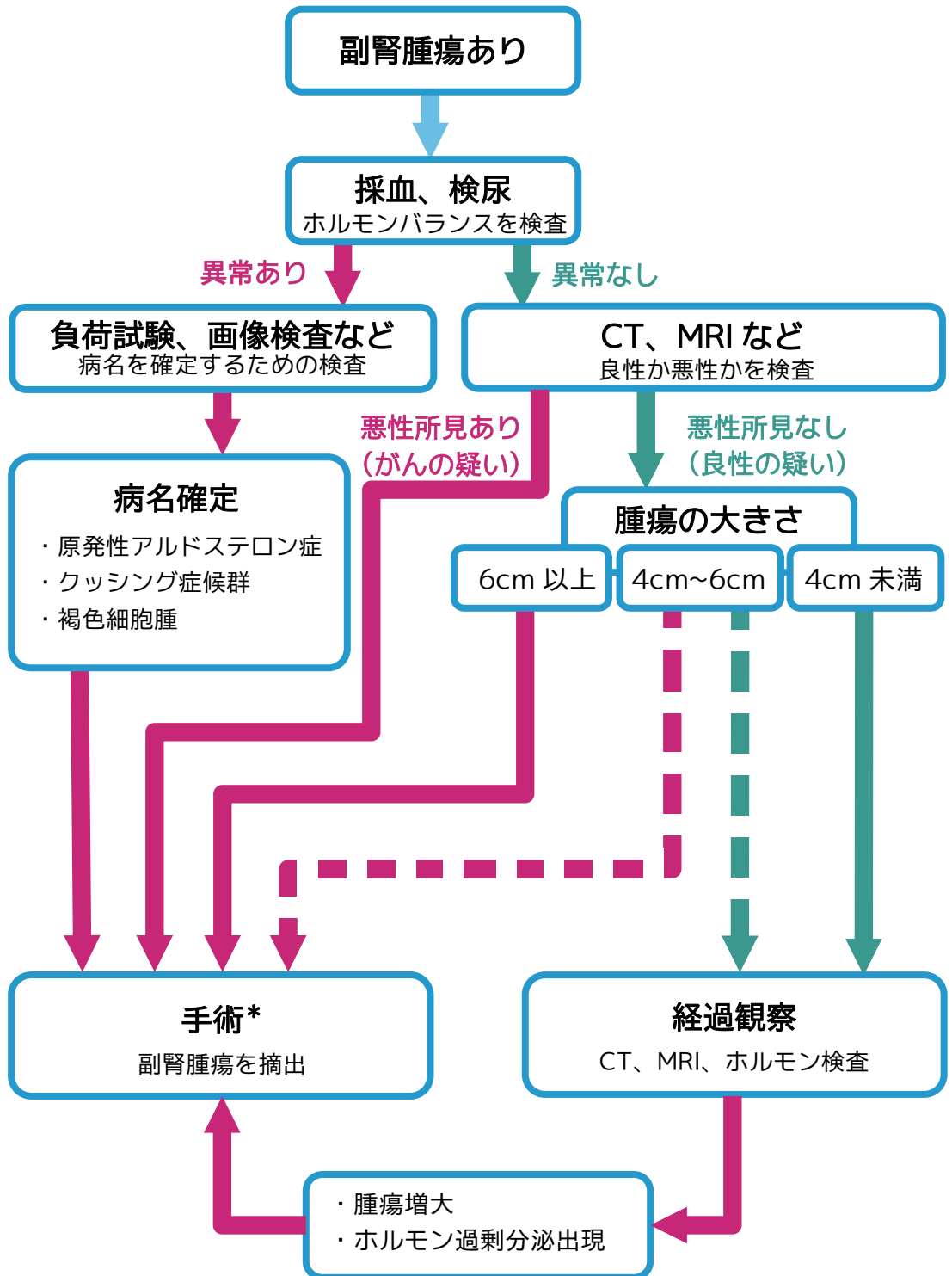


これらの検査で異常がない場合には、ホルモンバランスを乱していない腫瘍（非機能性副腎腫瘍）となります。ただし、経過とともにホルモンが過剰になることも考えられますので、採血などでの定期的な経過観察は必要となります。

少しでも不安をなくすために。
適切な治療を受けるために。
まずは、検査を受けましょう。



診療の流れ



*：病状によっては、必ずしも手術にならないことがあります(薬物治療など)。

副腎から分泌されるホルモンと過剰症

ホルモン名	アルドステロン	コルチゾール	カテコラミン
主な働き	血圧、塩分調整	生命維持	血圧調整
過剰症	原発性アルドステロン症	クッシング症候群	褐色細胞腫
過剰症の主な特徴	高血圧	肥満、糖尿病、高血圧	高血圧、ほてり、動悸

放置した場合の問題点

原発性アルドステロン症

- ・ 高血圧の出現と悪化
- ・ 通常の高血圧より脳卒中や心疾患、腎不全などの合併症を起こす確率が高くなる

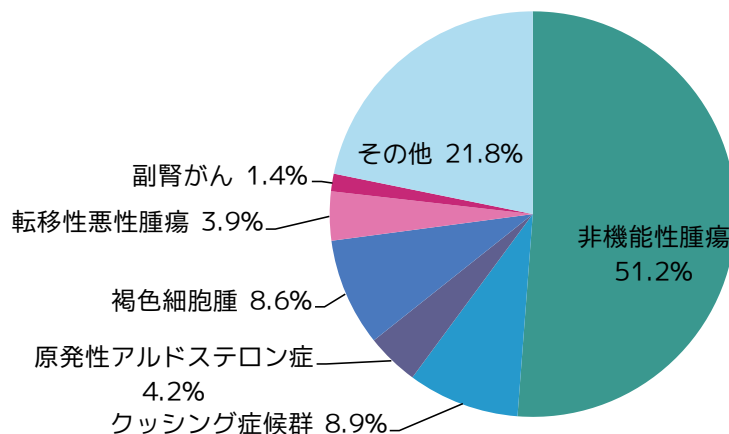
クッシング症候群

- ・ 糖尿病や高血圧の出現と悪化
- ・ 感染症の出現
- ・ 骨粗しょう症の出現

褐色細胞腫

- ・ 高血圧の出現と悪化
- ・ 糖尿病の出現
- ・ 外傷や全身麻酔、特定の薬剤などによって誘発される高血圧発作（クリーゼ）の危険性

副腎偶発腫の内訳



出典：厚生労働省副腎ホルモン産生異常に関する研究班
ホルモンと臨床 52：43-53,2004



発行：芳珠記念病院

第1版：2013年1月26日

—無断転載禁止—

本冊子の転載利用を希望される場合は、kikaku@houju.jp までお問い合わせください。

